

服をめぐる

衣服の研究現場より



一人一品

京焼作家 杉田眞龍

TAKE FREE

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI) 広報誌

21

2022.12

服をめぐる 21

一人一品

京焼作家×KCI収蔵品

バレ・デ・フルール

杉田眞龍「Palais des fleurs」(花の宮殿)

p4

KCI Wunderkammer

ダスト・ラッフル p12

地産街道を行く

桐生刺繍① p14

今日の補修室 第21回

補修室の七つ道具⑥ p20

学芸員の虫眼鏡

ボタン (19世紀初頭) p22

お知らせ p24

表紙の収蔵品



『Magasin des modes nouvelles, françaises et anglaises』誌より

出版社：Buisson
発行年：1787年
発行地：パリ

『Magasin des modes nouvelles, françaises et anglaises (フランスとイギリスの新しいモード誌)』は1786年から1789年まで、月3回の頻度で発行されたフランスの情報誌。1785年創刊の『Cabinet des modes, ou, les modes nouvelles』誌を引き継ぐかたちで刊行した。本誌は縦17cm、横10.5cmの小型版。パリの催事や社交界の情報、詩などの文芸、当時のファッションに関する情報が全8ページで構成される。また、毎号3枚差し込まれたファッション・イラストは手彩色銅版画という当時の最も新しいメディア。流行を知るうえで迅速かつ仔細な情報として上流階級の人々の心をつかんだ。

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「ドレス・コード? — 着る人たちのゲーム」展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展、「モードのジャポニスム」展など)や、研究誌『Fashion Talks...』の発行を通じて公開しています。Website <https://www.kci.or.jp/>



「華麗な革命」展
パリ装飾芸術美術館 1991-92年
©京都服飾文化研究財団 畠山直哉撮影

一人一品

京焼作家 × KCI 収蔵品

杉田 眞龍

Maryu Sugita

著名人が各々の目を通し、KCIの収蔵品に迫る「一人一品」今回のゲストは、2度目の登場となる京焼作家の杉田眞龍さんです。

杉田さんは京都五条坂にある清閑寺窯の四代目、杉田祥平氏の長女として生まれました。京都芸術短期大学の日本画本科・専攻科で学ばれた後、京都府立陶工高等技術専門校の図案科を卒業。さらに京都市工業試験場を修了され、1999年に清閑寺窯へ入り、祖父の三代目祥平氏、父の四代目祥平氏に師事されました。2014年に京焼伝統工芸士に認定され、2021年には五代目当主として清閑寺窯を継承されました。

前回ご登場の『服をめぐる』第14号で、杉田さんは18世紀の宮廷服を題材に茶碗を二碗制作されました。女性用宮廷服は可憐な姿に、男性用宮廷服はきりりとした佇まいの茶碗となり、各地での展示会で大きな反響を得ました。

今回、杉田さんが選んだKCI収蔵品は1855年頃のイヴニング・ドレス。クリーム色の生地に色彩豊かな花模様がプリントされ、大きく膨らんだスカートが特徴的な可愛らしいドレスです。京焼と西洋衣装のコラボレーション第二弾。一体どのような作品が出来上がったのでしょうか。

*第14号はオンラインでご覧頂けます。

https://www.kci.or.jp/publication/pdf/fukuwonoguru_014.pdf





収蔵品から生まれた茶碗



イヴニング・ドレス

1855年頃 フランス製
京都服飾文化研究財団所蔵 成田舞撮影

クリーム色の絹とウールのゴーズ織に草花のプリントが施された愛らしいツーピース・ドレス。大きく開いた胸元のデコルテ、なで肩を包む小さな袖、ウェストラインは腰の細さを強調するため切り替え線が下に向かって尖っている。スカートはふわりと膨らんだ三段のティアード・スカート。バラ、コスモス、わすれな草、矢車草などが11色で染められている。

ナポレオン三世が統治した第二帝政期(1852〜70年)のフランスは、鉄道敷設や市街改造などのインフラ整備、各産業の機械化や技術革新が飛躍的に進み、経済発展が著しかった。人々はその恩恵を受け、装いの流行を享受できる人口も大幅に増加したのがこの時代だった。

京焼の神髄——絵付の華やかさを求めて



KCI（以下、**K**）…この度は素敵なお茶碗を焼いていただき、ありがとうございます。杉田眞龍さんは『服をめぐる』『二人一品』2回目のご登場となります。前回ご登場の第14号（2019年11月発行）では、**KCI**所蔵の18世紀の女性用官廷服「ローブ・ア・ラ・フランセーズ」と男性用官廷服「アビ・ア・ラ・フランセーズ」を題材に、お茶碗を二碗作っていただき、各地で大変な反響があったと伺っております。今回は1855年頃のイヴニング・ドレスをお選びになり、それを元にお茶碗を作ってくださいました。その制作秘話などをお聞かせ頂きたいと思います。

杉田（以下、杉）…どうぞよろしくお願いいたします。

K…まずは杉田眞龍さんがご当主でいらつしやる「清閑寺窯」の歴史について教えてください。

杉…「清閑寺窯」はもともと京都東山の清閑寺という寺院で使用する陶器を焼く窯として、安土桃山から江戸初期に成立しました。この清閑寺窯を開いた寺僧宗伯に若き野々村仁清が弟子入りしたと言われています。しかし残念ながら、明治になって清閑寺が衰退するに伴い、清閑寺窯も閉窯してしまいました。

K…一旦途絶えてしまうんですね。それを杉田家が再興したということでしょうか。

杉…はい。明治初期に初代菊次郎によって杉田家の窯が開かれました。二代龍斎を経て、祖父にあたる三代祥平の時代、清閑寺窯の再興を願った旧華族の清閑寺伯爵家より清閑寺窯の窯印を頂戴し、

再興「清閑寺窯」として私の代まで続いているということです。

K…先程、野々村仁清の名前も出てきましたが、清閑寺窯を含めた現在の京焼というのは、江戸初期に比べて変化したところがあるのでしょうか？

杉…そうですね、色数が増えたというのが一番変わったところでしょうか。昔の京焼は登り窯で焼いていました。登り窯は火の温度管理が非常に難しく、微妙な色の差を出しにくかったんですね。仁清の時代などは青・緑・赤・金くらの色数で焼いていたと思います。それが今では電気窯に変わり、繊細な温度管理が可能になりました。それに伴い、色数がどんどん増え、現在は15色ほどを使用しています。

K…今回制作されたお茶碗を拝見して特徴的だと思ったのが、色を乗せた絵付部分が非常に盛り上がりつつあることです。横から見るとよく分かりますが、大変立体的な絵付ですね。これは清閑寺窯ならではのようです。

杉…はい、京焼全体がそういう特徴を持っていますが、とりわけ、清閑寺窯は絵付を盛り上げ、厚みを増して、より華麗な姿にするのを特色としています。絵付を盛り上げると、焼成時に絵の具が流れ落ちてしまうなどのリスクを負いますので、ここまで厚みを出すする窯は少ないのではないかと思います。

K…なるほど。清閑寺窯は華やかさを求め、絵付の表現に心血を注いでおられるということですね。

杉…清閑寺窯は色絵に特化した窯ですから、絵付に関して妥協しないようにしています。



ドレスのやわらかな空気感を伝統の技で表現

K…今回、杉田さんが制作の題材にお選びになったのは1855年頃のイヴニング・ドレスでした。全面に花模様がプリントされています。実際にご覧になった時、どのような印象を受けましたか。

杉…まず感じたのがやわらかな空気感でした。全面にプリントされている花の一つひとつがすごく軽やかで、ふんわりと優しい。それに大変心惹かれました。とにかく可愛くて、これを何とかしてお茶碗に取り込みたいというのが第一印象でした。

K…前回「服をめぐる」第14号で杉田さんが選ばれた18世紀の衣装は「織り」の生地で作られたものでした。今回は「プリント」の生地です。焼き物で「織り」と「プリント」を表現するのでは、違いはありましたか。

杉…はい。プリント特有の色の重なり合いを焼き物で表現できるのか、という課題がありました。これをお茶碗で再現するには、今までとは違う手法を取らないといけない、と。通常、京焼では草花を着色する際、一色で塗ることが多いんですが、今回は様々な色を重ねることで、花模様の色の重なり合いやグラデーションを再現しようと思いました。

K…このドレスがプリントを重ねて美しい生地になったのと同じような工程を、焼き物も辿ったということですね。

杉…はい。例えば、この部分は白色の上にピンク色、その上に紫色を重ねています。こちらでは不透明な水色の上に、透明の青色を乗せ、さらに紫色を乗せていますね。このように、ドレスの花模様が

K…確かに輪郭をくくらないことで、お茶碗に軽やかさが出ていますね。さらに、ドレスの形状もお茶碗の中に閉じ込めたとのことですが。

杉…まず、ドレスのデコルテのカットが非常に美しかったので、デコルテのV字形をデザインに取り入れました。それからウエストの部分。ウエストの切り替えのバイピングが緑と白で構成されていますが、これもお茶碗の中に取り込んでいます。さらに、通常よりも少しクリーム色の強い生地で土台となる茶碗を作ってもらい、その上に絵付をしていきました。

K…焼成についても教えてください。通常、清閑寺窯では3回焼成して完成とすることが多いと伺っていますが、今回は何度焼成しましたでしょうか。

杉…今回は5回ですね。絵の具を塗り重ねるのに4回、金で装飾するのに1回でトータル5回の焼成を行いました。焼成回数を重ねるごとに色の深みが増し、絵の具の盛り上がりができます。その分、失敗するリスクも増えますが、良い色を出したいという思いが強く、最終的に5回の焼成を行うに至りました。



ドレスの拡大写真。プリント特有の絵柄のずれが見てとれる。

持つ色のパレットを何とかして再現しようと努力しました。

K…花の縁取りを描く際にも、通常行わない手法を取られたと同じでした。

杉…京焼では草花を描く際、金で縁取りをした内側に色を乗せていきますが、今回は金の縁取り「金描き」をわざと途中で止め、輪郭をはっきり描かない表現を部分的に取り入れました。金でくれば絵柄はくっきりしますが、それではお茶碗が重々しくなってしまう。ドレスにはプリント特有の絵柄のずれがあり、そのことが花模様に柔らかなさを与えています。「金描き」を途中で止めることでそれを再現できるのではないかと考え、実践してみました。その部分は新しい手法と言えますね。

伝統をベースに新しい感覚を

K…今回でドレスを題材にお茶碗を作るのが2回目となりますが、いかがでしたでしょうか。

杉…焼成を何回重ねるか、プリントの花模様を再現するのにどの程度絵柄をずらすかなど、悩む部分もありましたが、制作が楽しくて仕方なかったです。今回はこれまで行わなかった技法をたくさん取り入れたので、新しい道に繋がるようなきっかけになった気がします。

K…最後になりますが、今後のご活動について教えてください。

杉…2021年に正式に清閑寺窯を継承して、まだ一年と間がありませんが、京焼というベースを大切にしながら、新しいものを作りたいという思いがあります。さまざまな事物に触れ、心に残る風景やものを焼き物という形で発信していけたらと考えています。

K…本日は大変興味深いお話をありがとうございました。益々のご活躍を楽しみにしております。

清閑寺窯

〒605-0846 京都市東山区五条橋東6-15-41
TEL 075-531-4337





ダスト・ラッフル

素材：絹
原産国：フランス
製作年：1881年頃

19世紀後半、欧米の華やかなシーンで着られる盛装用ドレスの多くには、トレーンという長い引き裾が付く。この種のドレスを着て戸外を歩くとき、ドレスが汚れないように、とトレーンの内側に取り付けられたのがこのダスト・ラッフル。幾重ものレース製だ。しかも草花柄が編まれた繊細なレースである。今の私たちの感覚ならば、服の一番よく見える箇所に付けたくなし、ましてや埃取りなんて、と思ってしまうが…。裾の細工ひとつとっても、当時の上流階級と私たちの意識の違いを感じずにはいられない。(筒井)



着装するとダスト・ラッフルは見えない。

シャルル＝フレデリック・ウオルト
レセプション・ドレス
京都服飾文化研究財団所蔵 島山崇撮影



珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫——そこはまさに「驚異の部屋」。

京都服飾文化研究財団所蔵
成田舞撮影

地産街道を行く
KCIの収蔵品にみられる
技法や素材を手がかりに、
各地を訪れます。

桐生 刺繍 ①



刺繍——古代より続く装飾

針に糸を通し、生地の上に何かの図柄や自分の名前を刺す。小学校や中学校の家庭科の授業でそんな経験をした人は多いだろう。縦、横、斜め…とあらゆる方向に針を進められる刺繍は、経糸と緯糸で一定方向に文様を織り出す織物とは違い、絵を描くような自由な表現が可能だ。道具も少なく済む刺繍を、コロナ禍のステイホーム中に始めた人も多かったと聞く。

刺繍は人類が衣服をまとい始めた頃から、世界各地で自然発生的に使われ始めた技法だと考えられている。たとえば、ヨーロッパの青銅器時代(紀元前3300年〜紀元前1200年)の毛織製衣服には、すでに刺繍の痕跡が確認されている。刺繍は、人々が身につけるものに何かを描き留めておきたい、という思いを的確かつ比較的容易に実現できる技法のひとつとして世界中で発展してきたのだ。

13000点を超す17世紀以降のKCIの収蔵品の技法にも、刺繍が見当たらない時代はない。精緻な草花刺繍の18世紀の宮廷用男性服、愛らしいイニシャル刺繍つきの19世紀前半の女性下着、そして手刺繍に代わり機械刺繍が盛んになった20世紀の総刺繍のドレスなど…。実に様々なバリエーションの刺繍を見ることができ、今回は近年の日本人デザイナーによる収蔵品を紹介したい。

白いユリ、赤い実、黄色いカリン…。みずみずしい草花や果実の文様が、織り、染め、刺繍で表された軽やかなドレスは、マメ・クロゴウチの2018年秋冬コレクションで発表された。和と洋が混在したような愛らしい佇まいのドレスだ。デザイナーの黒河内真衣子氏は自身の住まいやオフィスの周辺に植わっていた植物を写し取り、これらの文様をデザインしたのだという。デザインは指示書となり、各地の工場へ送られる。生地となる織りは北陸へ、次に染めの部分は京都へ、そして刺繍の部分は桐生へと――。



KCI収蔵品

マメ・クロゴウチ ドレス

2018年秋冬

京都服飾文化研究財団所蔵 成田舞撮影

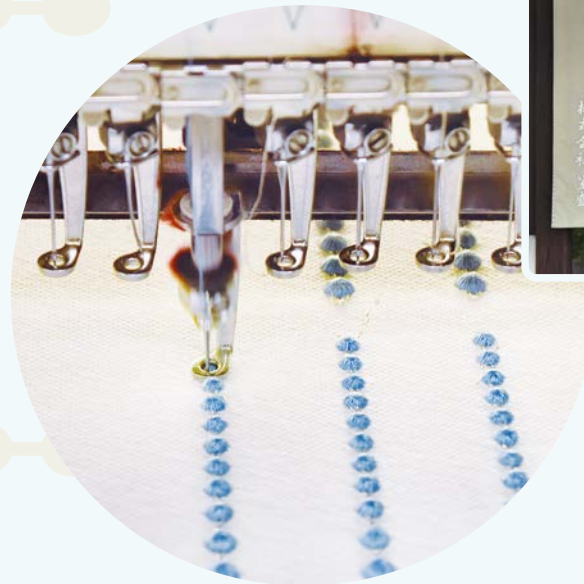
白の絹/ポリエステルによる平織とレースの身頃、袖は楊柳とレース。草花や木の実などが織柄とプリント、刺繍で写実的に表現されている。黒のスタンドカラー、手首とウエストに黒の飾り紐をつき。



花びらや雄しべ離し、木の実の膨らみや葉の曲がり具合など、デザイナーのスケッチ通りに丹念に刺繍が施されている。



10台の刺繍機が同時に動くなか、糸の調子や刺繍にエラーがないか、進み具合に目を光らせる。



上：創業145年を迎える俣笠盛の会長、笠原康利さん。

左：帯地の織物業としてスタートした俣笠盛。昭和37年、刺繍業へと舵をきることに。以降、国内外の刺繍機を導入し、様々なタイプの刺繍商品を開発している。

困難なこともあったようですが、戦後は輸出もすぐに回復しました。わが社でも昭和24年に生産した『笠盛献上』という着物帯が大ヒットしましたね。本当によく売れたらしいです。」当時の日本は「ガチャマン景気」と呼ばれた好景気のただなかで、糸へんが付く漢字の業種が大いに成長した。その頃の桐生は日本の織物製品の三分の一を製作するまでになっていた。

「でも、そんな好景気も長くは続かなくて、昭和30年代に入ると下火になってきました。そこで当時の社長だった父が新しく機械刺繍を始めたんです。機械は当時の西ドイツからマルコ刺繍機というものを輸入して。最初は靴下にポイントとして刺繍を入れて売っていました。」昭和37年のことだったという。「昭和30年代は織物だけでなく鉄鋼業など手広くやっていたんですけれど、刺繍だけが残り残りました。」その後、笠原さんが昭和48年に同社に入社した。

昭和30年代から40年代は未だ和装文化が色濃い時代だ。着物や帯の売上も堅調だったこの頃、織物からなぜ早々と刺繍へ転向したのだろうか。「織物は製品によって様々な材料を仕入れないといけません、刺繍の仕入れは糸だけでも成り立つ。さらに織物は一度に何反も織るので、売れないと大きな損です。その点、刺繍は単価が安いですが、リスクを抑えて長く続けられると先代は考えたんでしょうね。私が入社したころは機械刺繍のことは全く分かりませんでした。そこから勉強です。海外に作った工場を撤退させるという苦い経験もありましたけどね。」と笠原さんがこやかに答えてくださった。

伝統の絹織物から刺繍への転向

桐生といえば、京都の西陣と並び称される絹織物の産地で、群馬県の東部に位置する情緒ある古い街だ。マメ・クロゴウチはブランド設立当初から、刺繍の多くを桐生市の会社へ依頼をしているという。それが今回訪ねた俣笠盛だ。

JR両毛線、桐生駅から南東へ徒歩20分、渡良瀬川へさしかかる手前の市街地に、木造の立派なノコギリ屋根が連なる俣笠盛がある。「創業明治十年」と染め抜きされた大きなのれんの前で、会長の笠原康利さんが朗らかな笑顔で迎えてくださった。「帯地の織物業としてスタートした会社で、今年で創業145年なんです。」桐生で生まれ育ったという笠原さんは同社の四代目だ。「群馬はもともと養蚕が盛んでした。なかでも桐生は水が豊かな土地で、繊維を紡績する際に使う水をふんだんに使うことができました。産地として発展した大きな理由のひとつです。」東に桐生川、西に渡良瀬川。桐生の中心地は二つの豊かな川に挟まれ、かつては街のあちこちで水車が回っていた。

「歴史を紐解きますとね、関ヶ原の戦いで徳川方が使った旗は全て桐生で作られた絹織物だったんです。関ヶ原以後、江戸幕府の保護を受けた桐生は、高級絹織物の産地として全国に知られるようになっていきました。」そして時代が下り、明治に入ると桐生は機械化によっていち早く近代化を成し遂げ、大きく発展する。特に、薄く上質な織物である絹羽二重の生産拡大によって街は好景気に沸いた。「昭和初期の昭和恐慌や戦時中は



左：ネックレスをはじめ、ピアスやブローチなど様々な商品展開がある「トリプル・オウ（OOO）」。

下：とても軽い刺繍のネックレスは海外でも人気に。



ネックレスの拡大写真。刺繍とは思えないほど立体的な形状をしている。

取材にご協力頂いた企業・団体（敬称略）

株式会社 笠盛
〒 376-0005 群馬県桐生市三吉町 1-3-3
TEL：0277-44-3358
URL：http://www.kasamori.co.jp/

トリプル・オウ（OOO）
URL：https://www.ooo-triple.com/ja/

取材文・筒井直子 写真・五十棲亘

60年前に刺繍業へ舵を切った先代の先見の明。そして、今やマメ・クロゴウチをはじめ世界中のファッションブランドからの刺繍の依頼が絶えない企業となり、自社ブランドの商品も世界中から共感を得ている。「2000年企業を目指しているんです。」と笠原さんは胸を張る。「斬新な刺繍といえば笠盛と思ってもらえるようチャレンジしていきたい。」と。一針一針、刺繍は今も豊かで自由な技法として発展し、桐生という地で受け継がれている。

も安心してつけてもらえます。」と野村さん。現在では日本だけでなく、フランスやイギリスのミュージアムショップでも取り扱われ、人気の商品になっているという。



上：湿度による糸の変化を調整しながら、刺繍を進めていく。

左：ネックレスの端に留め具を丁寧に付ける。

「刺繍の作業現場をお見せしましょう。」と工場内へ案内いただいた。30cmほどの四角い箱が横一列に10台並び、一斉に同じ動きをしている様子が目に飛び込んできた。カタカタと針が小刻みに上下して細い糸が小さな丸になり、少しずつ盛り上がっていく。収蔵品のマメ・クロゴウチのドレスに刺繍されていた赤い実のようにふっくらと厚みがあつて可愛らしい。「ちやうどスフィア・プラスシリーズという、糸のネックレスを刺繍しているところです。」針先に目を凝らしていると、広報の野村さんが教えてくださった。このネックレスは、同社が2010年に立ち上げた自社ブランド「トリプル・オウ（OOO）」の製品のひとつだという。素材は植物性の「キュプラ」の糸で、玉状になるように刺繍をしていく。「土台の生地には刺繍をして、最後に熱湯で土台を溶かします。」完成品を見ると、糸をくるくると巻いた極小の手毬にも見え、刺繍という技法が応用されているとは思えないほど立体的だ。「機械刺繍の工程は単調に見えますが、その日の湿度にかなり左右されるので、糸を調整するのは繊細な作業なんです。」聞くと、湿度の高い梅雨時期は稼働できないアイテムもあるらしい。まるで農作物を育てているかのようだ。見た目も繊細な糸玉のネックレスの製造の背景には、とても細やかな配慮と工程があることを知った。そしてこのネックレスを手にしたときの軽さに驚く。「トリプル・オウ（OOO）」の理念は『優しいアクセサリを作る』なんです。ですので、肩が凝らないほど軽いですし、金属アレルギーを持っている人でも安心してつけてもらえます。」と野村さん。現在では日本だけでなく、フランスやイギリスのミュージアムショップでも取り扱われ、人気の商品になっているという。

刺繍によるアクセサリ制作への挑戦

TODAY'S RESTORATION ROOM

今日の補修室

第 21 回

補修室の七道具⑥



今回はスチームアイロンのための
手作りパッドをご紹介します

四角形や三角形、棒状のものに、長い柄のついたもの。お餅やパン生地のようにも見えるこれらは補修スタッフ手作りのアイロンパッドです。収納でついしまった「折りじわ」を伸ばす際に使います。使い方は左手にパッド、右手にスチームアイロンを持って、収蔵品にダメージを与えないように少し離れたところから、弱いスチームをごく短時間当てていきます。

このアイロンパッドのメリットは、衣装をマネキンに着せ付けたままスチームができること。そのため、衣装のあらゆる部位に合うよう、様々な形のアイロンパッドを作っています。実例をいくつか紹介しましょう。(上山尚子)



No.02 長い柄のついたパッド

袖など、筒状の箇所にはスチームを当てる際に便利。



No.01 細い棒状のパッド

リボンの輪っか部分などに適しています。



No.04 四角形のパッド



No.03 & No.04 三角形や四角形のパッド

ギャザーやタック部分などで使います。

Pickup!

パッドの裏と表

裏側に指を通して手と一体化できるゴムを装備。作業しやすくなるための一工夫です。

Back

Front



No.02 長い柄のついたパッド

No.03 三角形のパッド

No.01 細い棒状のパッド

item

ボタン

製作地：フランス

製作年：1810年ごろ

ジレと共布の生地は白い絹の縦畝織。
紫色の無燃糸と茶色の強燃糸による色糸刺繍。
寸法は直径約1.2cm。

note

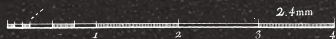
今回は、アビ(ジャケット)に隠れることの多い
ジレ(ベスト)のボタンに近接しました。重厚な
白い絹の縦畝織の生地に刺繍された多彩な小花
や葉。その中心にはくるみボタンが付いています。
アビの華やかなボタンに比べ、ジレのボタンは
非常に小ぶり。直径1.2cmほどの小さなボタン
には細かな刺繍が施されています。紫の色糸
の周りに見える緑の点線は刺繍のための下書き。
ジレはあらかじめ一枚の生地に身頃や襟、ポケット、
ボタンといった各パーツを刺繍し、裁断して仕立て
られることが一般的でした。切り出したボタン用
生地は木片や厚紙に巻き付けてボタンにします。
その際、ボタンの小ささから布地の縫い付けがず
れてしまうことも。この茶色の縁取りを土台に合
わせて縫うのは至難の業なのです。手縫いに苦
労した痕跡も、近づくことではじめて明らかにな
ります。(五十棲)

▶ 本品は、19世紀初頭の
儀式用男性服、アビ・ア・ラ・
フランセーズ。精巧な刺繍
や高価なレースに彩られた
アビ(ジャケット)・ジレ(ベ
スト)・キュロット(トラウザーズ)
の三つ揃いが特徴。

京都服飾文化研究財団所蔵
小暮徹撮影



file NO. 02



肉眼では見えにくい収蔵品の細部に、
学芸員の視点から迫ります。

学芸員の虫眼鏡

おしらせ

KCIホームページが新しくなりました。



京都服飾文化研究財団 (KCI) ホームページがリニューアルしました。これまでのコンテンツに加え、13000点の収蔵品のなかから、「宮廷衣装」「ジャポニズム」「日本人デザイナー」など、9つのテーマごとにピックアップした「Featured 特集」ページを新設。

KCIの活動やお知らせだけでなく、多彩な収蔵品をご覧いただけるホームページです。是非ご覧ください。

- 京都服飾文化研究財団
ホームページ
<https://www.kci.or.jp/>



- 「Featured 特集」ページ
<https://www.kci.or.jp/featured/>



服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第21号
2022年12月28日発行

発行

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI)
〒600-8864
京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
株式会社ワコール京都ビル内
電話：075-321-9221
ウェブサイト：<https://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城、五十棲亙 (京都服飾文化研究財団)
デザイン：坂田佐武郎、桶川真由子 (Neki inc.)
写真：成田舞 (Neki inc.)

編集後記

2022年、KCIは国内の様々な展覧会にて貸出し展示を行いました。そのなかのひとつ、「機能と装飾のポリフォニー」展が2023年3月5日(日)まで東京都庭園美術館で開催されています。1920年代のシャネル、ランバン、ヴィオネの衣装をはじめ、帽子やコンパクトケースなど8点の収蔵品を展示しています。ぜひお運びください。

東京都庭園美術館 URL
<https://www.teien-art-museum.ne.jp/>